薬物治療を導入し在宅移行の準備を行った肺がん患者さんの事例

帝京大学医学部附属病院　腫瘍内科
春山輝亘

60歳代女性

【事例の概要のみ掲載しています】

- 脳・骨・リンパ節への転移を伴う肺がんと診断
- 分子標的治療薬による治療を開始
- 骨の痛みに伴う歩行障害に対してオピオイド（医療用麻薬）による疼痛コントロール実施
- 地域包括支援センターとケアマネジャーの支援を受け、訪問看護・在宅診療を導入し退院

- 疼痛コントロールと栄養摂取が不良となり再入院、全身状態の改善を図る
- 低栄養と全身状態の悪化が徐々に進行し、改めて積極的治療を行わず症状緩和を主体とした医療・ケアを行う方針となった
- 栄養と食事、訪問入浴、在宅医療と介護の導入を行い退院

本事例の課題

- 本症例では、治療により原発部分の縮小と腫瘍マーカー減少を認め、治療自体の効果はあると考えられた
- しかし、経過中の疼痛、低栄養など全身状態のコントロールに難渋し、数か月の経過で全身状態の悪化が進行し、積極的治療が困難となった

検討していただきたい事項

１．治療・看護・在宅支援導入の点から、どのような関わりができるでしょうか？

２．進行肺がんと栄養不良、疼痛を抱える患者さんへのサポートはどのように考えたら良いでしょうか？

３．患者さん・ご家族の意思決定を支えるには、どのような取り組みがもとめられるでしょうか？

４．その他